

応募テーマ：地域活性化への貢献

「炉端談義」方式による地場産業活性化授業

- 地域と一体となった授業計画・実施・評価委員会によるものづくり教育 -

長山 信一(*1) 西頭 徳三(*2) 水島 和夫(*3) 小柳津英知(*4)
清水 克朗(*5) 沖 和宏(*1) 武山 良三(*1) 磯部 祐子(*4)

要 旨

本学周辺地域の銅器・漆器など伝統的地場産業は、ここ数十年停滞気味である。本取組はこの停滞の原因が、企業・自治体その他関係団体・大学間の連携の脆弱さにあると考え、地元関係者と教員・学生で構成する「授業計画・実施・評価委員会」を組織して、地域産業振興に寄与できる授業展開を考えた。

鑄込み場の端に関係者が集まって、実際にものに触れながら議論を深めるような形態を目指し、これを「炉端談義」方式と名づける。本取組では、一つの授業の成果が次の授業の素材となって、活用される連鎖型授業を展開して行くが、中間段階でも当該委員会が授業内容を点検評価して、必要に応じ軌道修正を行う。また、地場産業の生の声を授業に反映し、大学の取組姿勢を地元へ説明することで、公開性が高められる。

キーワード：現代GP、炉端談義、連鎖型授業、授業計画、地域活性化、

1 大学・短期大学・高等専門学校の基本情報

(1) 大学・短期大学・高等専門学校の特徴(概要)(*800字以内)

高岡短期大学は、「地域の多様な要請に積極的に応え、広く地域社会に対して開かれた特色ある短期大学を目指すとともに、我が国の短期大学の今後の運営及び教育研究の改善に資する」という設立趣旨に基づき、我が国唯一の独立の国立短期大学として昭和58年に創設された。

この趣旨のもと、本学の位置する高岡周辺地域の幅広い地場産業を背景に、3学科(芸術系の産業造形学科、産業デザイン学科とビジネス系の地域ビジネス学科)による教育を行っている。産業造形学科(金属工芸、漆工芸、木材工芸コース)は、伝統文化を踏まえた上で、現代のニーズに対応した制作が可能な学生の養成を目指す。産業デザイン学科(プロダクトデザイン、ジュエルデザインコース)は、人に優しく、使いやすいデザインを生み出す担い手を養成する。地域ビジネス学科(経営、情報、国際英語、国際中国語コース)は、地域企業や社会に貢献できる人材育成を目的とする。また、専攻科(産業造形、産業デザイン、地域ビジネス専攻)2年課程を設け、精密さと広がりを持つ知識と技術を修得し、地域の発展に積極的に貢献できる人材育成を目指す。教員には、開学当初から優秀な実務家出身者を多数任用し、授業では、基礎力の養成と実践の両面を重視してきた。

一方、国立短期大学として、新しい短期大学のモデルとなることを志し、開かれた大学として、特に地域社会とより密接な関係をもちつつ、社会的役割を確実に果たすことを目指してきた。例えば、公開講座は、全国に先駆け早くから実施しており、専任教員数51人で3講座を開く(平成15年度)実績を有するなど、地域への貢献は極めて大きい。また、地域との密接な連携の推進は、

* 1 産業デザイン学科, * 2 高岡短期大学長, * 3 高岡短期大学副学長,

* 4 地域ビジネス学科, * 5 産業造形学科,

研究とともに授業の中でも数多くの成果を生んでいる。

なお、平成 17 年 10 月には富山大学・富山医科薬科大学と再編・統合する予定であり、教育の更なる充実のみならず、地域連携、地域貢献の取組を一層展開する計画である。

(2) 大学・短期大学・高等専門学校 の規模 (平成 16 年 5 月 1 日現在)

学部等名，研究科等名 または学科名	学科(課程)数、 専攻数	収容定員数	在籍学生数	専任教員数
(学 科)		人	人	人
産業造形学科		1 0 0	1 0 7	2 3
産業デザイン学科		5 0	5 3	1 1
地域ビジネス学科		2 5 0	2 6 9	1 9
小 計	3	4 0 0	4 2 9	5 3
(専攻科)		2 8	4 7	
産業造形専攻		1 0	1 7	
産業デザイン専攻		1 2	1 4	
地域ビジネス専攻		5 0	7 8	
小 計	3			
総 計(合 計)	6	4 5 0	5 0 7	5 3

(3) 事業の実施期間中の組織改変等の予定

本学は、平成 17 年 10 月に富山大学及び富山医科薬科大学と統合し、本学キャンパスには、本学を母体とした(新)富山大学の芸術文化学部が設置される予定である。しかしながら、本学の学科は、平成 17 年度まで学生募集を行うので、平成 18 年度まで存続する。(専攻科は、平成 20 年度まで存続する。)

したがって、この事業の実施期間中(取組期間は、平成 16 年度から平成 17 年度)に大学間の統合が行われることになるが、本短期大学は存続するので、本取組への影響はない。

(4) 経費措置の状況

「なし」

2 取組について

(1) 取組の概要

本学周辺地域の銅器・漆器など伝統地場産業は長期的停滞にあえいでいる。本取組は、この停滞の原因が企業・自治体その他関係団体・大学間の連携のあり方、即ち組織化の脆弱さにあると考え、地元関係者と教員・学生で構成する「授業計画・実施・評価委員会」を組織して、地場産業振興に効果的に寄与できる授業を展開しようとするものである。鑄込み場の端に関係者が集まって実際にものに触れながら議論を深めるような形態を目指し、これを「炉端談義」方式と名づける。本取組では、一つの授業の成果が次の授業の素材となって活用される連鎖型授業を展開してゆくが、その際、最終評価に先立ち複数の授業が終了した中間段階で当該委員会が授業内容を点検評価して必要に応じ軌道修正を行える。また、地場産業の生の声を授業に反映でき、同時に大学の取組姿勢を地元で十分説明することで公開性が高められる。

(2) プログラムとの適合性

1) 取組を実施するに至った動機・背景

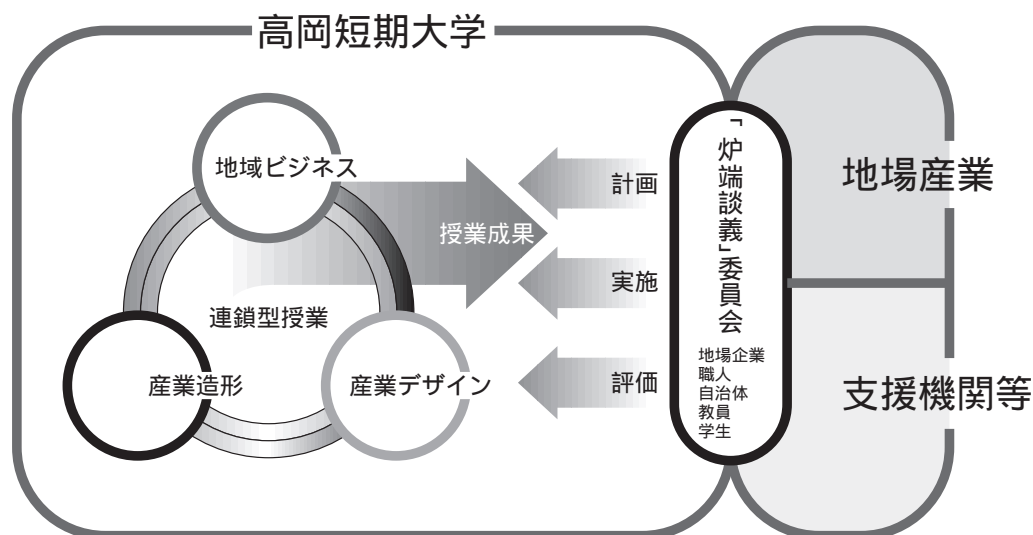
本学を取り巻く環境には、伝統地場産業とそれによって育まれた固有の地域文化が存在している。本学は、これまで、「地域に開かれた大学」という建学の精神にのっとり、固有の文化を有する地域の活性化のために、公開講座を中心として大きな力を注いで来た。しかし、伝統地場産業は、依然として、長期的停滞にあえいでおり、明確な活路を探し出せずにいる。特に、高岡を代表する伝統地場産業である銅器・漆製品の販売額が、ここ数年で半減したことがそれを表している(表1, 2参照)。

このような状況に対し、本学は、学生教育においても、地域のニーズを先取りした教育活動を展開してきたものの十分な効果をあげることができずにきた。その原因として、高岡の地場産業界が昔ながらの分業体制を色濃くもち、関係団体間の活動も十分な連携が取れておらず、大きな流れに結びつかない状況にあったことが考えられる。一方、大学側の教員の教育活動もその殆どが学科・コース単位、あるいは一教員の個人的裁量に限定される傾向にあった。すなわち、地場産業界も大学側も「点」としての活動に止まっていた、といえる。以上が、本学がこの取組に至った背景である。

2) 本取組の目的

本取組は、現在個々に進められている地域連携教育と、それによる地域活性化効果を互いに連鎖させる仕組みをつくることにより、「地域を繋ぐ大学」として機能させるものである(図1参照)。そのための手段として、本学教員・学生と地場産業界から招いた各部門の関係者で構成する「授業計画・実施・評価委員会」(以下、「炉端談義」委員会と言う。)を編成する。(写真1参照)この委員会では、今まさに地場が直面している問題をベースに授業計画を立て、大学の教科群が互いに連携する実施体制をつくり、終了後に評価を行う。(写真2参照)さらに、各教科で取り組まれた地域テーマに対する成果は、共有データベース化し、教育現場だけでなく地場産業においても活用し、様々な取組が連鎖する仕組みとする。このプログラムを教育現場と地場産業界の協働で進めることにより、効果的に地域活性化を行うことを目的とする。

図1 「炉端談義」方式による「授業計画・実施・評価委員会」の概念図



3) 教職員、学生の本取組に対する評価

地域連携による教育活動の特徴は、一般に地域との連携によって、教員・学生それぞれが強い動機づけを得られる点である。これまで、本学教員は、積極的に地域連携授業を展開してきたことから、現実的課題に学生を取り組ませることによる高い教育効果を予測している。また、個別的取組に終始していた教員は、点から線への仕組みづくりによって、他者の実践例を参考にできるので、本取組に大きな期待を寄せている。

一方、これまでの地域連携授業を履修した学生の授業評価アンケートを見ても、「学外の人からの評価が自分の予想と違うもので、よい刺激になった」、「作品が、実際に外に向けて発信され、評価を受けるので勉強になった」と、その意義を評価する感想が多くを占めており、学生の地域連携教育への期待は大きい(表 8参照)。

4) 取組の独創性・新規性

本取組には、今までにない次の4点の特色がある(図 2参照)。

「炉端談義」方式による委員会の設置

この委員会が独創的な点は、従来大学内部だけで行ってきた授業の計画・実施・評価を外部関係者を交えて行うことにある。外部関係者には、実務に携わる人材に参加を要請し、形式的ではない具体的な成果に繋げる組織とする。加えて、従来の委員会が会議室で手続き的に行われて来たことに対し、「炉端談義」方式では、必要であれば鑄込み場で実物に触れ、身体を使って徹底的に議論が行える環境をつくる。

授業の連鎖

一般的に大学での教育は教員個々の裁量に任せられ、同じ学科の教員であってもそれぞれがどのような授業を行っているかを知らない場合も多い。本取組では、お互いに授業内容を把握し、必要であれば授業の中で収集された調査データなどを活用できるしくみをつくる。さらに「炉端談義」委員会によって、教員が気付いていなかった連携の可能性も提案される。このしくみによって教員はあくまで従来通りの授業を基本としながら、少しの調整で授業間の連携を図ることができる。取組に参加し易く、自身の授業成果の向上にも繋がることから、横断的授業の実施が連鎖的に広がることが期待できる。

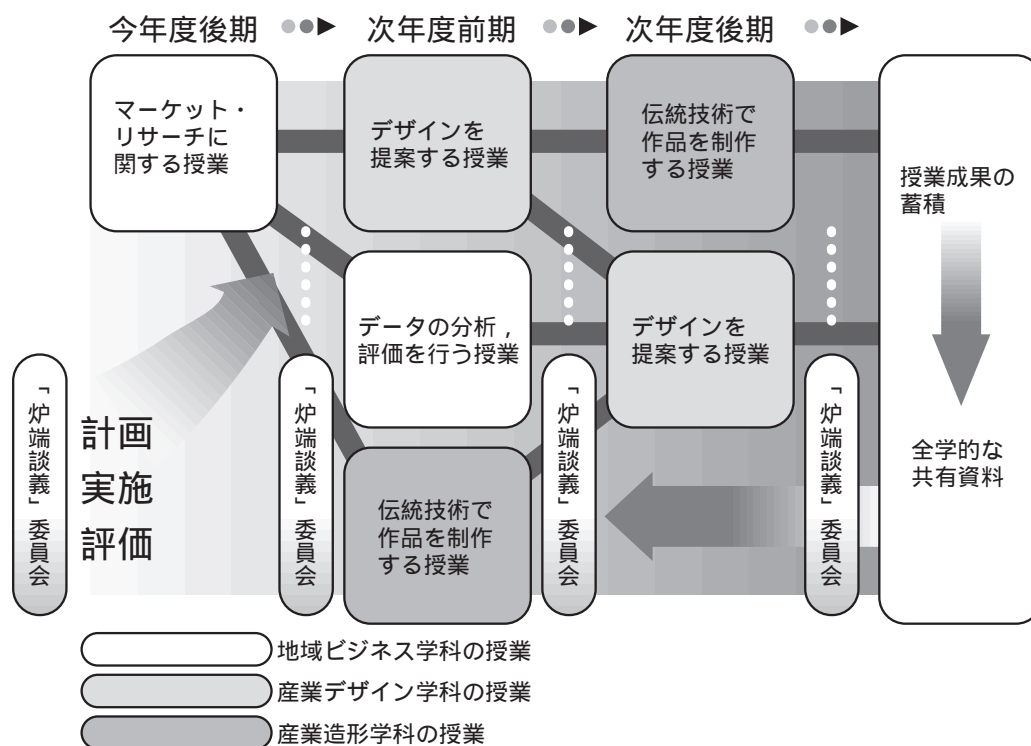
中間的な点検と軌道修正

本取組では、最終評価に先立ち複数の授業が終了した時点で「炉端談義」委員会が授業内容を中間的に点検評価して、必要に応じて軌道修正を行うことができる。

高い公開性

教員・学生は授業等でキャンパス内に留まる時間が長く、外部との交流が希薄になる傾向にある。本取組では地域の求める現実的課題を取り上げるため、関係者の関心も高まり、外部関係者の来学頻度が高まる。また、見学会などで教員・学生が地域に出かけていく機会も増える。このような人的交流が促進されることで、大学の地域に対する取組姿勢が十分に説明され、公開性が高められる。

図2 「炉端談義」委員会と連鎖型授業の概念図



(3) 実現可能性 (具体的な実施能力)

1) 取組の目標

本取組の目的は、高岡地域と一体となった「炉端談義」方式による地域連携教育によって、実社会でのケーススタディを通して、より実践的、創造的な能力と豊かな人間性を備えた、優れた人材を育成するとともに、コミュニケーション・ネットワークを広く、密に構築し、組織と組織、人と人とを繋ぎ、その連鎖的な効果により、「地域活性化」を企図するものである。

その具体的な目標として以下の7点を挙げる。

- 地場産業の問題点的確な把握 (産業デザイン学科、地域ビジネス学科関連授業)
- 地場産業の生の声を吸収できる体制づくり (「炉端談義」方式の確立)
- 地場産業の活性化に直結する授業内容の作成 (本学実務経験者を中心とする)
- 授業の円滑な運営 (地域連携教育)
- 授業間の効果的連鎖体制の確立 (共有データベースの確立)
- 適切な評価軸の確立 (学生及び地域社会の評価)
- 授業成果の地域への公開 (地場に対するデータベースの公開、フォーラム開催等)

この取組に当たって、本学は、すでに公的支援団体 (高岡地域地場産業センター、高岡市デザイン・工芸センター、高岡市文化財課、富山県総合デザインセンター、富山県産業高度化センター)、伝統地場産業界 (高岡銅器団地協同組合、伝統工芸高岡銅器振興協同組合) などとの連携授業の実績がある。また、それら諸団体の要求に基づく研究実践例も豊富である。

については既に、5年間の実績のある産業デザイン学科の科目『デザインの進め方』の「高岡銅器の未来を探る！」において、K法を用いた問題点や解決策のコンセプトパネル、その縮刷版レポートがあり、成果品であるレポートには関係諸団体から多数の問い合わせを受けている。この実績が本取組の端緒となっている。地域ビジネス学科においても、本取組の中で生活財調査を企画している。

については、本取組では「炉端談義」方式の導入やフォーラムの開催を企画している。従って、本学、の取組はスムーズに進むものと思われる。

、についても、本学の3学科の専門科目に関わる教員には多数の実務経験者が含まれており、地域連携教育においても適切な授業内容を作成することが可能である。

の連鎖型授業は本取組の骨子である。このシステムを可能にするためにも共有データベース構築が不可欠である。

については、学生及び地域社会の評価結果をフィードバックしてFDIに役立てる。

については、連鎖型授業の成果が共有データベースに蓄積され、次々に増殖して行く。この成果を常に地場産業関係者に公開し、新規商品開発に役立て、地場産業界が活性化することが本取組の狙いである。また、関係者及び市民参加によるフォーラムを開催する。

2) 計画

(a) 連鎖型授業の必要性

連鎖型授業の内容は、市場調査による現状把握 データの分析・評価による地域ニーズの把握 新しいデザインの提案 試作品制作の4つのフェーズに分けられ、それぞれの内容が成果となり、共有データベース化される。

本学の現在のカリキュラムにおいて、この4つのフェーズに関する授業が存在しているが、連携した時系列に配置されていない。したがって、本取組は、本学の既存のカリキュラムを見直し、連鎖したプログラムとすることが必要である。

(b) 「炉端談義」委員会による連鎖型授業の運営

「炉端談義」委員会は、銅器と漆器に関わる地場産業関係者（企業、職人等）、公的支援機関、授業担当教員、学生により構成される。この「炉端談義」委員会の議論に基づいて半期ごとの連鎖型授業は運営され、成果の向上を図る。

なお、上記の方法で授業を運営することによって、現在の教員組織、教育課程の変更を行う必要性はない。

次に、銅器と漆器に関わる地場産業関係者（企業、職人等）、自治体行政等の公的支援機関関係者との連携・交流に基づく「炉端談義」の形成が重要であるが、この点について本取組の担当教員は様々な地域の活動（プロジェクト・委員会）で十分に連携・交流の実績があり、「炉端談義」委員会の編成に必要な人脈は既に有している。また、最も重要な「炉端談義」委員会の円滑な運営についても、担当教員は地域の様々な活動（プロジェクト・委員会）で運営責任者を経験した実績がある。

以上から、本取組における具体的な実施の能力は、組織面、運営面でも十分に可能である。

3) 実施体制

本学及び本学教員・学生は、以下のとおり、長年にわたり地域と連携する教育活動等を行ってきた実績を有しており、このような実績に基づく本取組の実施可能性はきわめて高いと考える。

本学では、従来から各学科において多様な地域連携授業を、担当教員と地域との協力により数多く実施してきている（表3参照）。

本学教員の多くは、次のとおり豊富な実務経験、自治体等の活動に参画する経験を有しており、地場産業関係者等に呼びかけ、「炉端談義」委員会を組織し、中心になって運営しながら、地場産業の活性化のための授業を行っていく十分な力量がある。

A) 本学地域ビジネス学科は、日本鋼管、NECなど産業界出身者（5人）や野村総研、三菱総研など民間シンクタンク出身者（3人）をそろえており、『マーケティング』、『経営戦略』、『生産システム』、『地域経済』、『地域産業史』等の授業を実地に即して担当している。

B) 産業造形学科及び産業デザイン学科には、工芸作家、民間工房経験者、公立の工芸関係研究所・企業のデザイン部門やデザイン事務所を開いて活躍した者など幅広い人材（17人）がそろっている。

C) 現在多くの本学教員が、富山県、高岡市や関係団体の審議会、各種委員会、各種プロジェクト等に参画し活動している（例：富山県地域高度技能活用雇用安定会議委員、高岡市伝統的工芸品技術・技法継承者育成事業審査委員会委員）。また、県伝統工芸士会副会長など地域の美術・工芸団体の役員として活躍している教員もいる。このような経験は、「炉端談義」委員会を組織・運営していく中で有効に働くと思われる。

本学学生も上記の地域連携授業等を通して、地域の様々な関係者と接し、協力を得ながら学習してきた経験を持っている。また、本学は、開学以来社会人入学特別選抜入試を実施し、社会人学生を相当数受け入れてきたこともこの取組を進める際に有効と考えられる。

（4）教育の社会的効果等

1）高岡の伝統地場産業への効果

高岡の伝統工芸品である高岡銅器と高岡漆器に関わる地場産業界（図3参照）は、新規市場開拓と技能継承が課題と言われる（表4、5参照）。しかし、伝統地場産業は、多様な関連団体が独自に活動し、総合的な対応・支援策がなされていない。

こうした課題に対して、本取組は地域内の様々な関連団体（表6参照）が「炉端談義」方式によって伝統地場産業振興への総合的な取組を考える機会を提供する。この取組を通じて、学生や市民の高岡の伝統地場産業に対する認識が深まる契機となると共に、伝統地場産業に携わる関係者が地域社会や全国の様々な団体とネットワークを広げる効果を持つ（表7参照）。その結果、知名度の向上・技能継承PR効果・後継者確保の機会拡大が期待できる。更に、本取組の特徴は「炉端談義」方式を通じて様々な有識者・団体等の意見を踏まえ、学生が新しい製品コンセプトを提案し、その提案に基づく試作品の製造を行うことである。これは、高岡銅器や高岡漆器に関わる地場産業界にとって地域社会全体のニーズを踏まえた新商品開発を試行する絶好の機会となる（写真2参照）。このような「炉端談義」方式による地域活性化策は、他の地場産業地域の大学の格好のモデルとなり、波及することが期待される。

2）学生に対する効果

産地に立地し、学生にも地元出身者の多い本学において、地場の「ものづくり」という身近なビジネスの具体的事例を様々な授業で積極的に取り上げることが、授業内容の理解をより容易にする効果を持つ。また、地場の「ものづくり」について学科を越えた授業連鎖の形で学ぶことは、本学に今まで欠けていた学科を超えた学生同士の交流を促進させる。更に、「炉端談義」方式で地域の多様な団体から、講演者や学生に対するアドバイザーなどが授業に参画することにより、学生は多様な分野の社会人と交流の経験を積む良い機会を得る（写真2参照）。

本取組の特徴である授業の連鎖は、地場の「ものづくり」について自分達でアンケートを実施し、地域の人の意見を参考に「ものづくり」について自ら考えるというプロセスにより、従来の講義では得られなかった主体的な学習態度を育成できると期待される。

以上のような調査、実習、議論等の経験を通して、学生が現実に即したビジネス観や職業観を養うことに繋がる。

3）大学の社会貢献の実現

こうした取組を続けることにより、本学と地域のネットワークが強化され、地域のニーズを把

握した大学運営が更に促進される。また、地域に内在する問題に積極的に取り組む学生を社会に送り出す効果もあると考えられる。

(5) 評価体制等

「炉端談義」委員会は、次に挙げる3つの観点について、学内外の担当組織が集計したデータ提供を受け、それを指標として本取組の効果を評価する。

1) 授業の連鎖に関する評価

教務委員会における授業の連鎖内容の把握

ひとつの授業における学習成果が、他の授業の素材として活用された件数を把握する体制をつくる。具体的には、各学科で任命された教務委員が毎月開催される学科会議の席上で件数と連鎖内容を確認し、教務委員会に報告する。教務委員会は、3)で後述する「学生による授業評価アンケート」の分析結果と共に「炉端談義」委員会に資料を提出し、地場産業関係者を含めた評価を受ける。

授業連鎖の可能性を広げるための公開性の促進

授業連鎖を促進するためには、担当教員が気付かない連鎖の可能性を、全学的な視点から評価してアドバイスする体制が求められる。そのためには、まず全学的に授業内容が公開されるしくみをつくる。本学では、講義や実技が混在しているので、教務委員会は教員に様々な公開方法を例示する。レポート、課題講評会、学生発表会、パネル展示、作品展示など形態は変わっても、授業プロセスが把握できる資料が提示されるようにする。公開期間は余裕を持って設定し、「炉端談義」委員会委員が閲覧できる体制をつくる。この公開をもとに、「炉端談義」委員会は新たな連鎖の可能性を点検・評価する。この結果は教務委員会を通じて各教員にフィードバックされる。

2) 地場産業への貢献に関する評価

高岡で開催されている「工芸都市高岡クラフトコンペ」（以下クラフトコンペ）を評価の指標とする。「炉端談義」委員会は、クラフトコンペ実行委員会からデータ提供を受け、同コンペに及ぼした影響を分析することで、本取組の評価を行う。

クラフトコンペは、2004年度で18回目を迎える。高岡の銅器・漆器などの地場産業界と高岡商工会議所、高岡市が一体となって開催、2003年度は38都道府県から418名の応募があり、全国的に認知されたコンペティションとして定着している。地場産業の活性化を目的に始められたが、富山県内からの応募点数は伸び悩み、特に銅器を含む金属については、応募2,346点中126点と1割に満たない状況にある。（2003年度）

クラフトコンペは、「新商品開発」、「新たな人材の育成」、「消費者への需要開拓」を推進する事業であり、高岡地場産業の実態を把握する具体的な指標となる。そこで、本取組では、クラフトコンペにおける以下の項目を評価の指標として捉える

本学の学生及び教員の応募件数並びに入賞件数

地場産業関係者の応募件数並びに入賞件数

展示会への入場者数

即売される入賞作品の販売点数、並びに販売額

3) 学生の技能継承に関する評価

「炉端談義」委員会が、「学生による授業評価アンケート」と「地場産業への就職状況」に関するデータを基に評価する。

学生による授業評価アンケートの活用

本学では教務委員会が、平成15年度より学生による授業評価アンケートを実施している。現在は6項目26問について、マークシート式と記述式を併用した用紙が使われている。「炉端談義」

委員会は、「授業連鎖」に関する項目を検討し、追加を要請する。加えて、教務委員会から集計結果を受け、授業連鎖の効果や地場産業関係者との人的交流、企業見学などが及ぼした効果について評価する。

地場産業への就職状況

高岡銅器、漆器の関連会社、工房等への就職希望者数並びに就職者数を学生課が集計し「炉端談義」委員会に報告して、ここで評価を行う。

本学平成15年度卒業生の就職者数は170人（就職希望者170人、本科・専攻科計）で、そのうち富山県内に就職した学生は103人であった。この中で直接地場産業に関わる仕事に就いた者は8人に留まっている。この数かどのように展開していくかを指標として評価する。

3 取組の実施計画等について

本取組は、全体を、準備段階、実施段階、総括段階の3段階に分ける。

(1) 準備段階（委員会の組織と目標設定）

銅器・漆器などの地場産業関係者及び職人、公的支援機関の代表者、教員、学生など、大学と関係する団体及び個人のリストアップデータの作成。

「授業計画・実施・評価委員会」（「炉端談義」委員会）のメンバー選出。

「炉端談義」委員会のメンバー間で議論し、伝統産業の活性化に資する個別テーマを設定する。

(2) 実施段階（取組内容）

1) 調査・分析期（2004年度後期）

A. 産業デザイン学科・産業造形学科

地場産業の問題点的な確かな把握を目的として、授業科目『デザインの進め方』（本科1年）で、学生が高岡銅器や高岡漆器の製造・販売・流通の市場調査を行う。

高岡漆器協同組合や高岡銅器団地協同組合・伝統工芸高岡銅器振興協同組合傘下の工場や販売店で調査を行い、高岡地域地場産業センター、高岡市デザイン・工芸センター、富山県総合デザインセンター、富山県産業高度化センターなどで自治体の地場産業に対する支援体制を学ぶ。

調査結果を、学生が分析し、K法を用いて問題点を抽出する。

『デザインの進め方』で行った市場調査結果を「炉端談義」委員会と意見交換を行い、必要であれば追加の補足調査を行う。

連鎖する授業『リビングデザイン』（本科1年）では、『デザインの進め方』の調査結果を反映させるよう工夫する。

B. 地域ビジネス学科

新たな商品開発を目的として、『卒業研究（ゼミ）』（本科2年通年）の受講学生が、『地域経済』（本科2年後期授業の最初にアンケートの作成について学ぶ）で学習した知識を活かしアンケート項目を作成する。そのアンケート用紙を用い、『地域産業史』（本科1年）の受講学生が、出身家庭を新商品の使い手とみなして、その家庭の生活財調査を行う。

『経営管理』（本科2年）で、の調査結果に基づき、分析を行う。

、の授業は、同一時期に行われるが、「炉端談義」委員会のコーディネーションを基に、教員間の連携を密にし、本取組がそれぞれの授業に生かされるよう配慮する。

年度の終わりに、これまでの授業成果を共有するため、データベース化する。

2) 企画・立案検討期 (2005年度前期)

A. 産業デザイン学科・産業造形学科

前年度のデータベースを利用して、産業デザイン学科では、『まちづくり』(本科2年)、『製品デザイン』(本科2年)、『Cデザイン』(本科2年)、『デザインリサーチ論』(専攻科1年)の中で、地場産業活性化への対応方法についてコンセプトを企画立案する。

一方、産業造形学科においても、『込型鑄造』(本科2年)、『複合造形』(専攻科1年)において新たな製品の企画立案を行う。

なお、両学科の上記担当教員は、「炉端談義」委員会の場で、互いの進捗状況と問題点について、地場産業活性化の視点から意見交換を行う。

B. 地域ビジネス学科

地域ビジネス学科は、2004年本科2年生が行った調査・分析に基づき、専攻科生を中心に『地域企業経営』(専攻科1年)、『生産マネジメント』(専攻科1年)において、地場産業の場を考慮し、経営サイドから分析精度を高め、商品の流通や販売に配慮した企画立案を行う。

C. 全体

夏季休業中に、3学科の有志学生の融合チームと「炉端談義」委員会との合同による合宿特別セミナーを開催し、日常のさまざまな使用状況をシミュレーションしながら、集中的に新製品の開発企画に取り組む。このセミナーは、すべての学科で地域活性化のための問題点を共有し、学科間の連携を密にすることも意図する。

3) 作品制作・発表期 (2005年度後期)

A. 産業デザイン学科・産業造形学科

産業デザイン学科の『卒業研究』(本科2年)、『特別研究』(専攻科2年)では、学生のテーマに応じて提案された企画立案を取り込み作品化する。

産業造形学科では、『生型鑄造』(本科1年)、『彫金』(本科1年)、『漆工素地制作』(本科1年)、『卒業研究・制作』(本科2年)で、専攻科の『総合工芸演習』(専攻科1年)、『造形工芸実習』(専攻科1年)、『修了制作・研究』(専攻科2年)では、授業間で相互に情報交換を行い、連携を組み合わせながら、作品制作をする。必要に応じて軌道修正する。なお、本科1年後期の授業においては、学生自身に調査及び企画の経験はないが、蓄積されたデータを活用することにより、地域活性化を見据えた作品制作に効果的の視点が提示される。

本期の中間に、「炉端談義」委員会を開催し、実際の社会で有用であるかの視点から助言をもらう。そのことによって、学生の作品制作の軌道修正も可能になる。また、新製品開発提案の試作品は、本学独自の「インキュベーション事業」に発注する。

B. 地域ビジネス学科

『卒業研究』(本科2年)、『特別研究』(専攻科2年)において、学生のテーマに応じて、地場活性化への提言を取り入れた研究論文を作成する。

(3) 総括段階

「炉端談義」委員会において、1年半に渡る連鎖型授業プロジェクトの総括を行い、授業の成果を次のような形で公表する。

授業の成果を学内外で行う「卒業・修了制作展」などで公表する。

授業成果を積極的に公開するため、地場産業界の関係者及び市民参加による「フォーラム」開催。

学生及び教員が「工芸都市高岡クラフトコンペ」他、全国で開催されるコンペティションに積極的に参加することを支援し、これを制作品発表の場として活用する。

「データ、資料等」



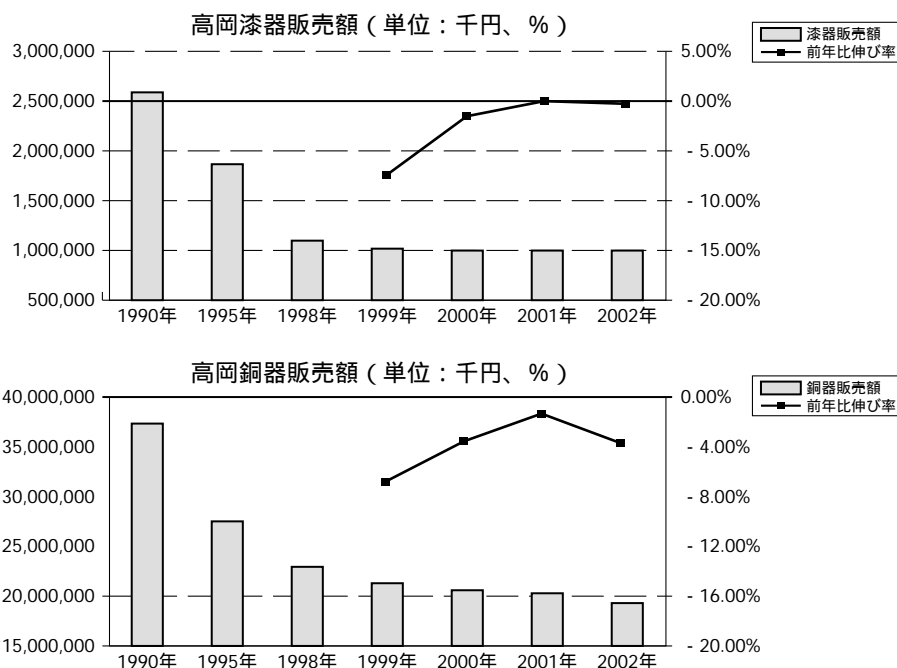
写真1 本取組の魁となった授業のひとこま



写真2 学生参加で議論白熱のセミナー

表1 高岡市の銅器、漆器の販売額の推移

高岡漆器と高岡銅器のいずれも1990年に比較してここ数年の販売額は大幅に落ち込み、前年比マイナスが続いている。



出所: 高岡市資料より高岡短期大学作成

表2 製造品の出荷額も人口も減少する高岡市

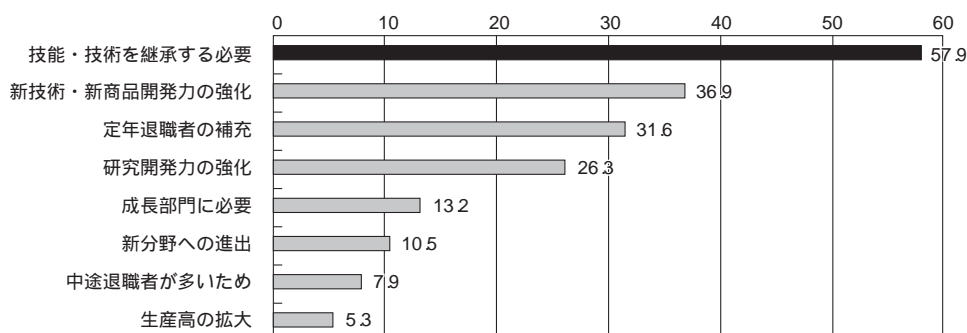
・・製造品出荷額等を減少させている都市(岐阜市、名古屋市、高岡市、金沢市、一宮市、富山市、豊橋市、津市)では、豊橋市、津市を除きいずれも卸売機能を低下させており、さらに地場産業都市である岐阜市、高岡市では人口の減少とともに昼間人口も大きく減少させている。

出所: 中部経済産業局編「中部地域経済産業の将来展望(中間とりまとめ)」

表3 本学3学科の地域との連携授業一覧

	授業名	実施年度	概要	担当教員名	対象学年
産業造形学科 専攻科産業造形	複合造形	H10	タカタレノス時計製作所と連携した卓上時計制作	中村，小松， 斉藤	専攻科 1年
	指物法	H11	スウェーデン・カペラ・コーデン美術工芸学校との連携授業 富山県小杉町黒川保育園と連携した「歳児のための椅子制作	小松	
	手道具での加工	H11	スウェーデン・カペラ・コーデン美術工芸学校との連携授業 廃材を利用した孫の手の制作	小松	本科 1年
	造形工芸実習	H12	岡崎ヤスリ製作所との連携による爪ヤスリの制作	小松	専攻科 2年
	複合造形	H12	金森銅器加工所との連携	中村，小松， 斉藤	専攻科 1年
	造形工芸実習	H12	イタリア料理レストランのエントランスボード制作	中村	専攻科 1年
	卒業制作	H12	パン屋の看板製作	中村	本科 2年
	造形工芸実習	H13	中島工務社と連携した漆の乾燥棚制作	小松	専攻科 1年
	造形工芸実習	H13	割烹料理店の置き看板製作	中村	専攻科 2年
	造形工芸実習	H14	富山市松井靴店と連携したシューケア用品の収納箱制作	小松	専攻科 1年
	造形工芸実習	H14	広貴堂株式会社と連携した薬箱の制作	小松	専攻科 1年
	手道具での加工	H14	活魚料理「魚八」布野博氏の，鋭利な刃物による切削の美的効果， 盛りつけの構成要素の実演	小松	本科 1年
	造形工芸実習	毎年	地場の木地師との連携。学生が図面を描き、木地師に制作を依頼。 この交流を通じて木地制作にあたっての留意点を学ぶ	林	専攻科 1年
	金属工芸演習 木材工芸演習	毎年	武生ナイフビレッジとの連携授業。ナイフの制作	中村，小松	専攻科 1年
	総合工芸演習	毎年	米三家具、八尾和紙文庫への取材と把手の制作	三船，高橋， 河原，渡辺雅	専攻科 1年
	変わり塗り	毎年	産地見学	高橋	本科 2年
漆工素地加工	毎年	産地見学	高橋	本科 1年	
特別講演	毎年	地元職人による講演	全員	全員	
産業デザイン学科 専攻科産業デザイン	まちづくり	H10-	高岡のまちづくり活性化策について、行政や商店街関係者を招いて議論	武山	本科 2年
	総合デザイン実習	H11	御祭祭ホームページ作成	武山	専攻科 1年
	特別研究	H11	万葉線島口トランジットステーションのデザイン	武山	専攻科 2年
	プレゼンテーション	H12-	1学年全員が金屋町の御祭に参加し新聞記事を作成	綾田，吉田， 武山，他	本科 1年
	デザインの進め方	H12-	「高岡銅器の未来を探る」と題して、関係諸施設を調査・分析	長山	本科 1年
	広告デザイン	H12-	高岡・御祭屋通り商店街の新聞広告を制作。H13年度からは水見の商店・企業を対象にデザイン	沖	本科 1年
	特別研究	H12	弥栄節の振り付けCGアニメーション	武山	専攻科 2年
	リビングデザイン	H13-	高岡市工芸・デザインセンターの協力を得て生活用品を鋳物で制作	長山	本科 1年
	C Iデザイン	H13	高岡商工会議所の呼びかけで参加した地元企業のC Iデザイン	武山	本科 2年
	パブリックスペース	H13	高岡市コミュニティバスの車両やバス停のデザイン	武山	本科 2年
	インターフェースデザイン	H14	高岡市中心市街地バリアフリー化に向けた音声誘導装置のデザイン	武山	本科 2年
	パブリックスペース	H14-	高岡市のゴミ収集ステーションや金屋町のポストをテーマに関係者と連携してデザイン	島津，前田	本科 2年
	特別研究	H14	アルミ材を用いたオフィス家具の提案	森田	専攻科 2年
	総合デザイン実習	H14	高岡市末広町商店街のペーカリーのショップ計画	武山	専攻科 2年
	タイポグラフィ	H15	富山総曲輪通りのバナー制作 コンペに参加し最優秀賞を受賞し 実際に掲出された	長谷川，武山	本科 1年
	タイポグラフィ	H15	万葉線南両デザインのコンペに参加，採用案に選ばれ現在走行中	長谷川，武山	本科 1年
グラフィックデザイン演習	H15	ノーマイカーデー推進の企画・デザインを行い，市役所や公共交通 活性化フォーラム会場で成果発表	武山	専攻科 1年	
特別研究	H15	アルミ材を用いたCDショップの什器デザイン	武山	専攻科 2年	
特別研究	H15	高岡末広町商店街のペーカリーのショップPOP計画	武山	専攻科 2年	
デザインプレゼンテーション	H16	日仏景観会議・高岡に展示する高岡の景観紹介パネルの作成	武山，沖	本科 2年	
商品企画立案演習	H16	平成16年度より制度化された「プロジェクト授業」として、万葉 線のネクタイをデザイン	武山	専攻科 1年	
地域ビジネス学科 専攻科地域ビジネス	地域産業史	H15	富山銀行譲取による地域経済に関する特別講演，高岡市文化財課の担当者より高岡の文化財と保護政策について講演をしてもらい、学生より質問票を送付し、さらに解説をもらっている。	小柳津	本科 1年
	卒業研究（ゼミ）	H15	「おわら風の盆に関するマーケティングリサーチをテーマに調査研究を行った。兼山県八尾町は毎年9月の土曜日に旧市街地で盆踊り事業を行うが、延べ2万人を超える観光客が観覧し、社会問題化する素地がある。八尾町の当業者の意識と観光客の意識・期待のギャップについて、両者からアンケート調査結果を比較分析することで、問題点を定性的かつ定量的に測定できたことは、町の観光協会と共有できる貴重な収穫となった。これ以前に、客観的な意識比較調査データは存在していなかったことから、地域への貢献は大いである。	吉田	本科 1年
	社会環境と産業	毎年	毎年、地域の生産現場、物流センター等に事前に学習の上、見学を行っている。今年度はイオン高岡ショッピングセンターで高岡南部地域活性化推進協議会のケータイサイト事業について、トナミ運輸小杉物流倉庫、情報センターで物流システムについてそれぞれ見学と講義を受ける。	吉田	本科 1年
	卒業研究（ゼミ）	H14	学生の求めている車・カーオーディオに関する調査分析 - をテーマにサーチを行った。このテーマは高岡市内の自動車部品メーカーに就職内定している学生が、この企業が新規に取り組もうとしているカーオーディオに関する若者の志向をリサーチし、将来の仕事に役立てることを目指して取り組んだ。結果、限定された各層ではあるが、地元の製造業では入手困難なオリジナルデータを収集・分析し新商品開発のための情報を得られたことで、成果があげられた。	小柳津	本科 2年
	卒業研究（ゼミ）	毎年	毎年、地域の企業にヒアリングを行い、フィードバックもしているが、昨年は特に北陸銀行高岡支店で開業資金借り入れに関する講義を受けた。	滝沢	本科 2年
	卒業研究（ゼミ）	毎年	学生が富山県の山田村に出かけて、山田村の主婦や高齢者にパソコンの活用方法を学生が個別に学習支援している。	小松	本科 2年

表4 高岡地域で高度技能労働者が求められる理由（複数回答 38事業所）



高岡地域で高度技能労働者が求められる大きな理由は、技能・技術の継承と新技術・商品開発力の強化であり、技能の継承と新技術の開発が課題であると言える。

出所：「高岡地域高度技能活用雇用安定プラン」平成14年3月高岡地域高度技能活用雇用安定会議のデータより高岡短期大学作成

表5 高岡地域における熟練技能者の機能分類（鉄鋼・非鉄・金属・機械分野）

高岡地域においては、熟練技能者が多数存在しものづくりの機能が集積している。中でも周辺の機能の熟練技術者が多い特徴を持つ。この理由を下記報告書では、下請部品メーカーが多数立地していると分析しており、新しい受注分野の開拓や新製品開発などの地域全体の取り組みが求められていると言えよう。

類型	職種名	人数
重装備型	製缶・溶接	98
	板金	110
	プレス	99
	鋳造	0
	鍛造	23
	熱処理	14
	塗装	26
	メッキ	22
	小計	392(38.4%)
機械加工型	切削・研磨	28
	金型・治工具	30
	小計	58(5.7%)
周辺の機能	加工・組立	164
	着色	9
	修理・検査	68
	仕上げ	44
	その他	285
	小計	570(55.9%)
総計		1,020

出所：「高岡地域高度技能活用雇用安定プラン」平成14年3月 高岡地域高度技能活用雇用安定会議より抜粋

表6 本取組を支援する関連団体

<p>地場産業を支援する公的な機関 高岡市商工労働部、高岡市文化財課、高岡商工会議所、ハローワーク高岡</p> <p>民間の機関 富山銀行調査部・日本政策投資銀行富山支店の担当者などが挙げられる。</p> <p>地場産業界の関係機関 高岡銅器団地協同組合、伝統工芸高岡銅器振興協同組合、高岡漆器協同組合などがある。</p>

表7 地域の産官学ネットワーク化の必要性

<p>広域的な視点からのネットワークの形成 地域の課題克服には、前述の主体性や先駆性の発揮とともに、地域産官学が有する経営・知的・政策のそれぞれの資源の有機的なネットワーク化を通じた、資源の相互補完や総合力の強化が求められている。このため既存の組織・行政の枠を超えた広域的なネットワークの形成が求められる。</p>

出所：中部経済産業局編「中部地域経済産業の将来展望（中間とりまとめ）」

表8 地場連携授業に関する学生のコメント例

教科名			概要
広告デザイン			地元商店街企業を依頼主に、現実のデザイン行程を体験する。制作物は依頼主の審査等を経て、実際に広告として実施される。
実施年度	対象学年	履修者数	学生コメント例
平成 15	産業デザイン 学科 1 年	20名	学外からの評価が自分の予想と違うもので刺激になった。とても責任重大で大変な課題だった。けれど絶対役に立つ。現実というか、社会の厳しさをつきつけられるものだった。作品が実際に外に発信され、評価を受けるので勉強になる。
教科名			概要
プレゼンテーション			地域祭事の取材・発表や企業人を迎えた講演など、地域と連携した教材の中で、プレゼンテーションの基礎技術と知識を学ぶ。
実施年度	対象学年	履修者数	学生コメント例
平成 15	全学 1 年生	190名	すぐ役立つ授業だと思いました。特に面接で。企業の人の話が聞きたいので、時々招いて欲しい。他学科の学生や企業や作家の方との交流は充実していた。コミュニケーションの仕方について、プラスになりました。
教科名			概要
社会環境と産業			地域の大型ショッピングセンターにおいて、物流システムについて見学と講義を受ける。
実施年度	対象学年	履修者数	学生コメント例
平成 15	地域ビジネス 学科 1 年	59名	社会の仕組みが、ほんの少しだけわかった。いままで知らなかったことを知ることができた。日常では触れることのない企業戦略を知ることができた。企業見学は興味深い。

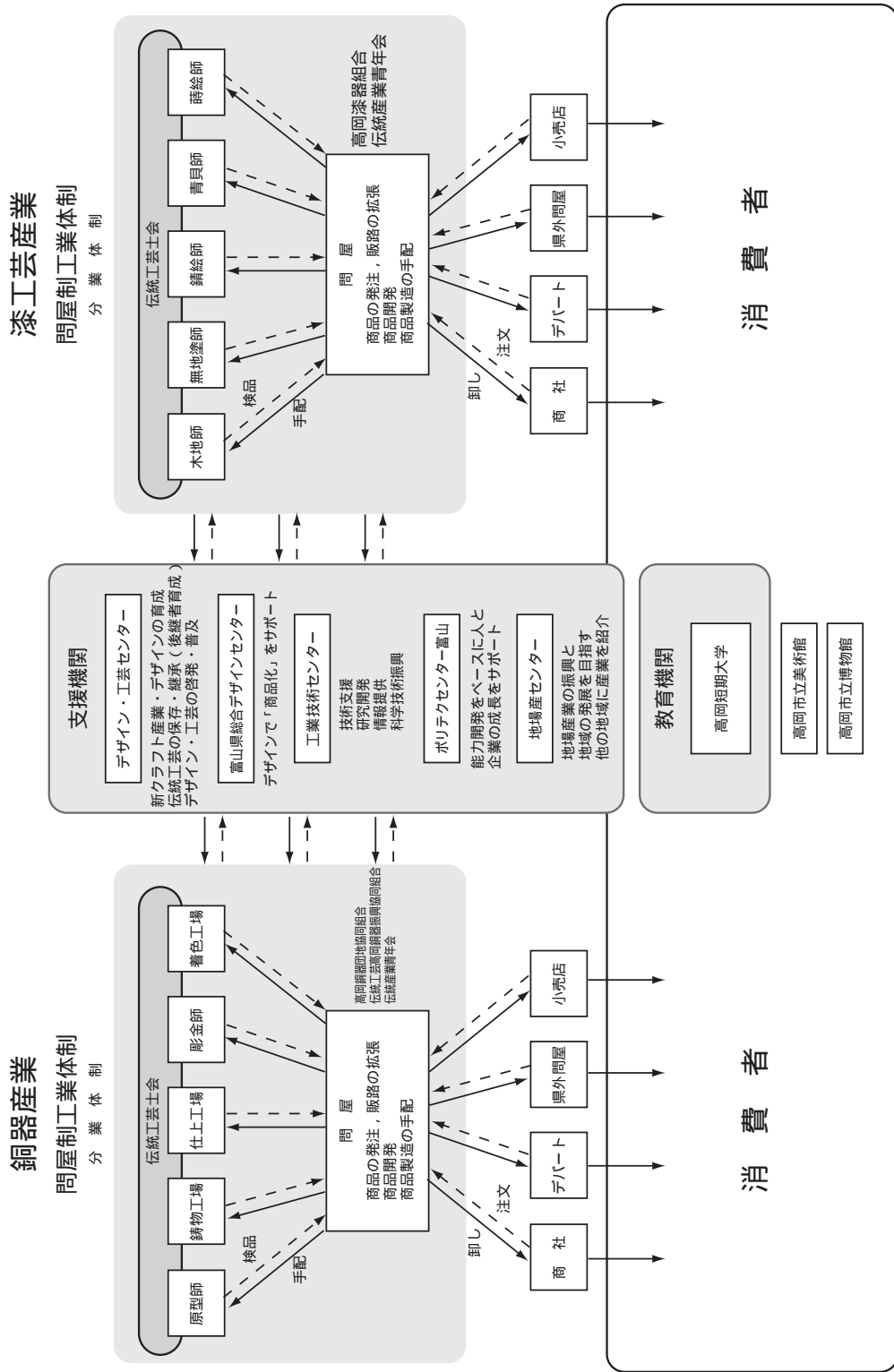


図3 高岡地場産業構造概念図